

はじめに

近年日本に在住する外国人登録者数は増加の一途をたどっています。岩手県においても平成10年に3,708人だった外国人登録者は平成21年末には6,349人と約2倍に増加しており、その半数以上が短期的な滞在者ではなく、「生活者」として日本で暮らしている外国人です。その外国人の中には日本人の配偶者として、出身国、言葉、文化などが違っていてもこの地域で日本人と同じように生活している“お嫁さん”たちが大勢います。

北上市国際交流ルームは平成8年9月に設立しました。当初の日本語学習者のほとんどはALT（英語指導助手）で、日本滞在年数2～3年の短期滞在者でしたが、年ごとに日本人男性を配偶者に持つ外国人花嫁が日本語を勉強したいと訪れるようになりまし。その学習者の日本語能力はほとんどが初心者で現在に至っています。しかしながら、そのように日本で「生活」していく「日本人の配偶者」に適切な日本語のテキストがありませんでした。本書『いわての「生活」日本語』はまさにそのような学習者にぴったりのやさしく学べ、やさしく支援できる日本語学習教材です。

「生活者」のための日本語教材とはどのようなものかを研究するために岩手大学教育学部で日本語について学び、この研究をさらに明確な形にしたいと考え、(財)自治体国際化協会が主催する「平成22年度地域国際化協会等先導的施策支援事業」の「外国人との共生」というテーマに、この『いわての「生活」日本語』テキスト作成事業を申請したところ、助成決定と採択されました。お陰さまでこのたび本書を発行する運びとなりました。

本書はどここの家庭にもある平凡な毎日の生活場面から「日本人の配偶者」に必要な場面を10選び、それに「岩手らしさ」というローカル色を少し加えた構成にしました。なぜなら、岩手の“お嫁さん”の生活環境は、夫が兼業農家の息子で会社員、また夫の両親と同居または近くに住むということが多いからです。そのため、周りの人々は方言を自然に話し、イントネーションの違う発音もすることでしょう。本書では、そのように“お嫁さん”を囲む周りの人たちの誰もが生活現場での「指導者」としての役割ができるように設定していますので方言も「味」と捉えています。

本書では、日本語を学ぶことにより、何ができるようになるかを一つの大きな目的にしています。各課に目標をかかげ、様々な活動を通し、日本語を実際の生活場面で道具として使っていくうちに成果が得られように工夫しました。学習者が学んだ「日本語」が生活の場で本当に「通じた」「わかった」「役にたった」と実感してもらえることが、指導者にとっても「役に立った」と思える瞬間です。まさに「言葉」がコミュニケーションの手段として使われたと感じる時であり、その経験が多くなればなるほど学ぶ側も、指導する側も上達してきます。そんなうれしい瞬間を一人でも多くの「日本で生活している」外国人と分かち合いたいと願っています。

また、本書を活用して地域の外国人が日本語を学ぶことにより、親しい友達や仲間作りにつながり、相互交流の輪が広がっていくことを願っております。このことが「多文化共生」社会の一助になれば幸いです。

本書の作成にあたり、岩手大学国際交流センター准教授の松岡洋子先生にご助言いただきました。また、斎藤理加さん、鈴木里佳さんのお二人にはほのぼのとしたイラストをたくさん描いていただき、とても親しみやすいテキストとなりました。方言は文字から見ると音で聞く方が理解しやすいので、北上さくらホールのご協力により付属のCDを作成いたしました。スタッフ・キャストとなり、手作りのホームドラマのように仕上がりました。写真撮影では「胡蝶」さまのご協力により実際に天ぶらを揚げ、また、北上市内の病院をはじめ、多くの施設で快く撮影をさせていただきました。お陰さまで文字が分からない学習者に効果的な視覚でおぼえる教材となりました。また、マナーの違いなどを地域で活躍している外国人に多言語で翻訳していただきました。このように多くの皆様にご協力いただき作成いたしました。皆さまに心から深く感謝申し上げます。

2011年1月

北上市国際交流ルーム チーフ アドバイザー
オフィス キララ 代表
薄衣 景子